
Hate

お空

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H a t e

【Nコード】

N 5 3 9 9 B A

【作者名】

お空

【あらすじ】

拷問の裏にある文学ストーリーです。

1話

「ごめんなさい…！」

謝っても、許されない罪。

しかし私はここで一生を謝り続け、惨めに生きる。

*

「…え、枢木さんが…」

私は水筒を机に置き、相手の顔を見た。

「…うん」

相手の、春雨葵は私の正面に立ち、暗い顔でうつむいた。

「そんな…」

私は驚きと不安を隠せなかった。

昨夜、枢木アスカが行方不明になったからだ。アスカとは幼馴染みで、同じ繋がりがあった。

「ウチらに出来ることは、アスカの無事と帰りを待つことだけだね…」

葵の論に一理あると思った。

確かに、私達が探したところでアスカが見つかるとは到底思えない。

「そうだよね…」

沈黙が流れ、昼休みが終わった。

私の通う学校は普通の市立で、中学校だ。昔は評判の良い学校だったが、近年は低迷しているらしい。

私がアス力に対して、“ただの行方不明”とは思えなかった。ただの、という表現はおかしいかも知れないが、私は死ぬよりも辛い地獄を味わっているのではないかと思うと、足が震えた。

それは、私の従姉妹、かおりが行方不明になり、結局は死んだ。死に様は酷かった。

右肩と左足は失っており、右目と左耳が潰れていた。豊乳だったかおりの胸は千切れていた。何故、ここまで生きていたか不思議なくらいだった。

私は、1年前、非通知で誰も居ない倉庫に呼び出された。

“ かおりは預かった ”

そんな内容を男の声が発した。

明らかに怪しいと思ったが、誰にも言うことは許されなかった。相手の男が言えば皆殺しと脅してきたからだ。私は仕方ないので、その場所へ向かった。あらゆる交通機関を利用し、やっと着いたと思えばかおりはあのさまだ。

怒りと恐怖が同時にたちこめたが、怒りの方が断然勝利していた。当時の私は、その呼び出された倉庫まで行くことが安易ではなかった。どの電車に乗っていいかも分からないし、それらしい地下鉄に乗ってみたは良いけど、どこで降りたらいいか全くもって分からなかった。本屋で購入したマップと睨みあいながら、なんとか目的地までたどり着くことができたのだ。途中、人に尋ねたりしなかったのは言うまでもない。お母さんには“ 友達ん家に泊まり ”とテキストに言っておいたのは、私が一晩かかってるかおりを助け出そうとしたからだ。

隣の倉庫に着くと、姉さんが仰向けになって呻いていた。歯がなかったので会話することは不可能と思われた。筆談、なんて論外だった。

かおりの指は千切れていたり、紫に変色していたり、折れていたり

と大変そうなのは遠目からでも理解出来た。
かおりの周辺、この倉庫自体、なんだか濡れていた。

「…か…おり…」

やっと声が出たと思えば、私がいったかおりの名前は震えていた。
その瞬間、かおりが低い声で呻いた。さっきよりもわずかに声量が大きい。どうやら、声を出すのもツラらしい。

「えっ…」

体育館ほどの広さの倉庫は、よく分からないダンボールで埋め尽くされていた。出口入口兼用で、入るドアは私が立っているところ1つだ。

かおりの姿は小さく見える程だった。それは右肩と左足を失っているからだろうか。どちらにせよ距離は十分ある。

私がかおりに駆け寄ろうとしたと同時だった。爆音がしたのは。

かおりの腹から、ダイナマイトのようなものが見えたような気がした。

爆風で私は思わずドアにしがみつき、目を閉じた。

瞼を開いた時にはもう既に、辺りは真っ赤な炎で包まれていた。
しかし私の後ろまでは火は回っていなかったなので、夢中で走り出した。

空は、どこまでも青かった。

息切れが限界なので、私は近くのベンチに座った。辺りは木ばかりで、誰も居ない。一刻も早く家に帰りたかった。こんなところに居たくない気持ちは山々なのだが、どうやって帰ればいいのか分からなかった。泣きたくなった時だった。

「こんにちは、安藤ナツキさん」

カッコイイ男の人が目の前に現れた。いつの間にか現れた男は怪しい、よりもただひたすらカッコ良かった。こんな美青年を見るのは初めてだった。見とれて、返事を忘れていた。

その後だった。何故私の名前を知っているのだろう、と不思議に感じたのは。

「お疲れさまです。今回のことは、誰にも言わないで下さい。約束通り…分かってますよね」

男は確実にそう発言した。

怪しい、と思つて気が付いた。この美青年は非通知でかけた男なのだ。そうなると、コイツはかおりを殺した可能性が大いに高い。男の口調は、“約束通り…”のそこから、冷たく冷血に言葉を放った。顔は美しいのに、どこかが殺人鬼だと感じた。

「あ、はい…。じゃあ、こっちの条件、聞いてくれますか」

少なくとも、殺人鬼だな、と疑つたにも関わらず私はそんなことを言つた。この際、殺されても構わないと思つたのは、この事がまだ現実だと受け入れられないからだろう。きつと、何かの夢に違いない。

「はい」

男は無表情だったが、美しい目だけは笑っていたように見えた。

「私を家の近くまで送って行ってくれませんか…あのっ…帰り方が分からないので…」

当時、中学１年だった私にはこの敬語が精一杯だった。

「ははっ…良いでしょう。子供から交換条件を…悪くないですよ。分かりました。あなたには、良い仕事をしてもらいましたからね。少々お待ちを」

男はそう言った。怖いとは感じなかった。何故か子供扱いが嬉しかった。今のお年頃じゃ嫌がる筈（普段、私も嫌がる１人）なのだが、相手が美青年だからかつい微笑みたくなった。

しばらく待っていると、男が車を用意してきた。シンプルな乗用車だった。車内は清潔で、何も置かれていなかった。多分、CDやティッシュ、ましてや領収書一枚すら入っていないだろうと推測した。

私は、後ろの席に乗った。

走行中、停車中も、一言も言葉を交わさなかった。

降りる時、これは交換条件です、お忘れなきを、とか言われ、無事家に辿り着けた。

家に帰ると、温かいご飯が私を迎えてくれた。

かおりのことはショッキングではあったが、日が経つにつれ思い出すことも少なくなっていた。さすがに、見た一週間くらいは夜も眠れないくらいの衝撃を受けていた。

食欲も当然ないのだが、お母さんに“何かあった”と悟られてはいけないと思い、無理して口に詰め込み、水で食道に流した。

吐くのは、後で構わない。（お母さんにバレない二階の部屋だ。ちなみに家は一軒家である）。

とりあえず、平穩、いや、今まで通り、を装った。

私もバカではないので、皆殺しの件を忘れていたわけではなかった。それに、あの男ならやりかねないと、淡々とした口調を見て子供ながらに感じていた。

やはり、かおりの死に際…しかもあのような情景を目の当たりにしたことは今でも忘れるはずがない。

*

「柩木さん…行方不明になつてゐるそうね」

お母さんは台所で洗い物をしながら、そう言った。

私はソファから起き上がった。

「…うん…。…何で知っているの？」

疑問に思った。

「ママさん情報よ」

お母さんは洗いながら答えた。なるほど、納得できた。

「アスカ…どこ行っちゃったんだろう…」

私は語りかけるようにつぶやいた。

「生きてて欲しいわ」

母さんがトーンを低くして言った。多分、かおりのことが頭に浮かんだのだろう。

親戚一同は、行方不明と言ったらかおりのことが思い出されるのだ。無理もない。あれだけ不安にさせておいて、結局は焼死で発見さ

れたのだから。挙げ句の果て、死体は残酷であつた。

私は、今夜なかなか寝つけなかった。自分で言うのも何だが、私の取り柄なんて精神力くらいしかないだろうと思った。

最終的に仮眠できたのは朝の3時だった。液晶画面を見ていると目が疲れてきたので、目を閉じるとそのまま浅い眠りについた。

*

「安藤さん」

誰かが私の名前を呼んでいる。体が重くてよく分からない。

「安藤さーん」

この声は水上優斗だと判断した。その瞬間、肩に触られる感覚を覚えた。

目が覚めた。

「おはよ」

水上が笑顔で私を見た。

どうやら私は授業中寝ていたらしく、隣席の水上に起こしてもらったらしい。

「お…はよ」

恥ずかしさで死んでしまいそうだった。幸い、うつ伏せになり両腕で顔を囲んでいたので、寝顔を見られなくて済んだ。よだれも垂れていない。大丈夫だ、合格――

「安藤さんって寝起きの顔、めっちゃ眠そうだね」

じゃなかった。水上が言った。不合格決定だ。

「え…」

ショックのあまり気絶しそうだ。

「大丈夫。安心しな。変じゃないから」

水上は笑って私の肩をぽんと叩いた。10分休みなので、水上は友達のところへ去った。

私は呆然とさっきの言葉をリピートした。

変じゃないってことはカワイイってことですか。

いや、あり得ないなと思い直して次の授業の準備をした。

それでも、顔は熱かった。

私は見ての通り——水上優斗のことが好きだ。1ヶ月前から。

私が落とした消しゴムを拾ってくれた。隣の席なのだから、当たり前かも知れない。だけど水上が微笑んで手渡ししてくれた瞬間、恋に落ちた。単純過ぎかも知れない。けどあの時、消しゴムを落とさなければこの想いを感じることはないのだ。

そもそも、恋に落ちる瞬間なんてそういうものだろう。

昼休み、女子の間では柘木アスカの話で持ちきりだった。

内容は、ヤバイよね、とか、どうなるんだろ、や帰ってきたらどういふ感じになるだろうとかだった。アスカと私が幼馴染みなのは結構な公認らしく、私にも話題がふられたこともしばしばだ。

その度に私は「知らない」「分からない」と答えるばかりである。実際、そうなのだが私は皆よりも知ったような感じに襲われる。

もしかしたら、それは私が心の裏側でアスカが行方不明になったこ

とを喜んでいるかも知れない。

*

私とアス力は幼馴染みで、連絡もとりあっていた方だ。

年賀状はもちろん、半年に一度はショッピングに行ったりする仲だった。特に気を使う必要もないので、愚痴を聞きあったり気になる人を言い合ったり、変態話もたまにするぐらいだった。メールは一週間に一度のやりとりだったと思う。私自身、アス力といると楽しかった。ありのままを受け止めてくれるし、昔からの付き合いだと、以心伝心な部分も多々見られた。

そんな一週間前だった。

偶々、私とアス力は登校中に通学路で会った。アス力は朝練があるので、非常に珍しいことだった。話を聞くと今日コーチが休みなので久しぶりに部活も休みになったらしい。

「へえ。やっぱりテニス部って大変だね」

私は言った。

「そうそう。もう嫌になるわ。だけど、ね。最近頑張れんだ」
アス力の表情は嬉しそうだ。

「あんな鬼メニューを？どうしてよ、また」
私は本当に不思議だった。

「水上千くん！良いよね。同じグラウンドだからよく話すんだ」
嬉しそうにアス力が言った。

頬を赤く染めるアス力はいつもより可愛かった。

自慢かよ。そう感じながらも、悔しかったのは事実だ。

「ふうん」

私はテキストに応じて、後はよく覚えていない。ただ、アスカを邪魔な存在だと確信したのは明白である。

それから数日後になる。

枢木アスカが行方不明になったのは。

もしかするとアスカは死ぬかも知れないという恐怖が沸き上がる。同時に、かおりが死んだのは私のせいかも知れないという仮説も浮かび上がってきた。
いや、あり得ないだろう。

私は元々、精神力などないかも知れない。分からない。

何だか、最近分らないことだらけに思える。

それでも、水上に対するこの気持ちだけはハッキリしていた。

私は帰宅部で、グラウンドで頑張っている水上は見れないのは残念だった。帰宅部はすぐ帰らないといけない義務があるからだ。フェンスからでは、水上個人を見ることは出来ない。

それでも、アスカが水上と仲良く出来ないと思うと、自然に顔は綻んだ。

やはりアスカは行方不明のままで良いかも――。

内心そう思考しようかと考えたが、すぐにやめた。
アスカが私の幼馴染みであることは変わらないのだから。それでも

二つの感情が脳裏で交差した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5399ba/>

Hate

2012年1月14日21時49分発行